「中本」受容と大島屋伝右衛門

――版元、そして貸本問屋として――

松永瑠成

はじめに

蔵書目録や営業文書、あるいは書籍に貼付された摺物、押捺された蔵書印などから、貸本屋の具体的な蔵書を窺い知れる。その蔵書は時代や地域によって多少の差異がみられるものの、おおむね娯楽性の強い作品を中心に形成されている。近世後期を例にあげれば、洒落本・読本・滑稽本・人情本・草双紙といった戯作の占める割合が非常に大きい。明治一〇年代、東京牛込区細工町の貸本屋池田屋清吉では、戯作をはじめとする近世期の作品がしきりに貸し出されており、貸本屋の蔵書内容と利用者の嗜好は、近代初頭に至ってもそれほど変容しなかったことがわかる(注1)。

さて、貸本屋が右のような蔵書を形成するまでの過程、特に書籍の入手に関しては長友千代治氏が四つの方法を提示している。すなわち、①版元からの直接購入、②貸本屋からの購入、③「貸本類仕入所」や「古本売買所」などからの購入、④貸本屋自身による制作（特に写本）の四つである(注2)。このうち①③については、貸本屋旧蔵本にみられる広告や摺物から書籍の仕入れ方法を分析した長友氏(注3)のほか、馬琴の書簡に基づく調査により、貸本屋が版元から読本を購入していく様子を浮かび上がらせた濱田啓介氏の研究がある(注4)。とはいえ、こうした版元・貸本屋間における書籍流通の実態は、未だ十全に明らかにされているとは言い難い。

そこで本稿では、先行する研究で言及されていない滑稽本や人情本を中心とした中本の版元・貸本屋間における流通に注目する。この流通を明らかにする方策として、ここでは書肆大島屋伝右衛門を取り上げる。大島屋は「人情本中その大半はこの文永堂から発行されたと云つても可い位」(注5)、または「中本版元の第一人者」(注6)などと称されるほどに中本との関わりが指摘されていながらも、これまで研究のされてこなかった書肆

である。本稿では、そうした大島屋の出版活動を概観していくなかで、版元が貸本屋へ中本を供給していく構造の一例を明らかにするとともに、大島屋が人々の中本受容に果たした役割について考察していく。

一　大島屋伝右衛門の概要とその系譜

大島屋伝右衛門は、江戸京橋弥左衛門町の書肆。文永堂と号した。明治以降は「武田伝右衛門」「武田文永堂」「文永堂書店」とも称している。「書物問屋名前帳（古組）」(注7)、「地本双紙問屋仮組」(注8)の双方に名前を見出せることから、書物問屋・地本草紙問屋を兼任していたようである。

管見の限りで大島屋の携わった最初の出版物(注9)は、文化一二年に和泉屋市兵衛・三崎屋清吉・中村屋幸蔵らとの相版で出版された振鷺亭作『御利生正札附千社参』初編である(注10)。対して最後の出版物は、大正九年（一九二〇）二月五日発行の行徳王江著『日本名勝詩選』第六版および近藤元粹著『篆刻鍼度』第六版、同著『杜工部詩醇』第六版である(注11)。これら三書は、全て大正七年に廃業した青木嵩山堂から求版したものである(注12)。よって出版物から確認できる活動時期は、文化一二年から大正九年となる。大島屋は少なくとも文化年間から明治・大正にわたる約百年もの間、営業を続けていた書肆であったのである。

大島屋のように、近世後期に創業した書肆が大正年間まで営業を続ける例はそうみられない。稀有な存在であるにも関わらず、歴代伝右衛門の系譜や具体的な出版活動の実態はこれまで明らかにされてこなかった。そこで、まずは断片的な資料や記述を整理しながら歴代伝右衛門の系譜を辿り、大島屋の概要を整理していく。なお、現時点では系図および墓碑を見出だせていないため、便宜的に存在を確認し得る最初の伝右衛門を仮に初代としている。

初代伝右衛門の生年や出自、『御利生正札附千社参』初編を刊行するまでの経歴は一切不明だが、当初は貸本業を営んでいたと考えられる。これは近世後期から近代初頭における書肆のなかに、はじめは貸本業を営み、後に版元となった例を多く見出せることと(注13)、架蔵の写本『よし原雀』(注14)に押捺された「山形に大伝」の矩形墨印（**【図1】**）の存在に基づく推測だが、後述する貸本屋を念頭に置いた出版活動にも、こうした経験が活かされていると思われるため、その蓋然性は非常に高い。

初代伝右衛門の名がみえる確かな資料には、先に触れた嘉永四年（一八五一）、問屋仲間再興時の名前帳「地本双紙問屋仮組」がある。

弥左衛門町家主　大島屋伝右衛門

安政三辰年五月十八日播磨守殿御内寄合此伝右衛門病死ニ付同人伴安次郎事伝右衛門と改名跡相続願済同廿日申渡

同人伴安次郎事伝右衛門

この安政三年（一八五六）五月に病死しているのが、初代伝

右衛門であろう。とすれば、必然的に天保の改革で処罰されたのも、この初代ということになる。市中取締懸が天保一二年（一八四一）一二月に提出した「絵草紙并人情本好色本等之義ニ付申上候書付」（注15）には、天保の改革で処罰された版元ならびに、その版元が蔵版していた書籍の一覧が記されている。このうち、大島屋の項を抜粋する。

弥左衛門町家主書物問屋伝右衛門所持罷在候板木

一恵の花（『春色恵の花』）初篇ノ分 二篇迄 六冊
一梅暦（『春色梅児誉美』）初篇ノ分 四篇迄 拾弐冊
一辰巳の園（『春色辰巳園』）同断 拾弐冊
一英対暖語（エイタイダンゴ）（『春色英対暖語』）初篇ノ分 五篇迄 拾五冊
一懐中歴（『花暦懐中暦』）初篇ノ分 四篇迄 拾五冊
一貞操深雪松（『貞操深雪松』）初篇ノ分 二篇迄 六冊
一八堅志（『婦女八賢誌』）初篇ノ分 四篇迄 拾弐冊
一雪の梅（『春色雪の梅』）前篇ノ分 後篇迄 六冊
一蘭蝶記（『蘭蝶記』）初篇ノ分 三篇迄 九冊
一文のはやし（『文のはやし』）初篇 三冊
再板もの
一二筋道（『傾城買二筋道』）初篇ノ分 後篇迄 六冊
（適宜、括弧内に該当する書名を補った）

天保の改革で摘発された大島屋を含む版元七人には、次のような判決が下された。

弥左衛門町家主地本屋伝蔵（ママ） 外六人

右之もの共儀絵本草双紙類渡世致し風俗之ためニ不相成猥かましき事又は異説等書綴候書物類売買いたす間敷旨之町触相背人情本と唱候小冊物之内ニは男女之勧善にも相成苦かる間敷と心得違ニ而長次郎ニ著述為致候小本は改受候而も追々増補いたし風俗ニ拘不宜候所売渡売徳（ママ）取候段不埒ニ付売渡取上過料五貫文つゝ

右本類板木共取上ル本類は焼捨間其旨可存（注16）

先にみた『春色恵の花』や『春色梅児誉美』をはじめとする人情本が風紀を乱すとして、売上金の取り上げと過料五貫文の支払い、および版木の取り上げと書籍の焼き捨てが命じられたのである。この時、初代伝右衛門の蒙った損害は並大抵ではなかったはずだが、彼は亡くなる安政三年まで大島屋を存続させ、次の世代へと引き継いでいる。

二代目伝右衛門は、先に引用した「地本双紙問屋仮組」の記述にあったとおり、初代伝右衛門の亡くなった同年同月に名跡を継いだ伜の「安次郎」である。正確な生年は不明だが、ある程度の経歴と亡くなった時期は以下の資料から判明する。

一つは、四葩山人が書き留めた二代目伝右衛門自身による回想である（注17）。

青山堂の父大島屋伝右衛門といへる人あり当年七十五歳の高齢なるが、钁鑠として記憶明晰、嘗つて丁子屋の小厮として、馬琴に親しく面会し、又当時の状況を詳にすと聞き、一日伝右衛門氏を青山堂に訪ひ、其懐旧談を聞き、聞

くに随つて筆記せるもの左の一篇なり、（中略）ハイ何から申上げてよいのか、大分古いお話でも御座いますし、記憶して居らぬ事も沢山御座いますから、其お積りでお聞取りを願ひます。当時私の奉公して居つた文渓堂の主人が即ち丁子屋平兵衛で御座います

傍線部にみえる「青山堂」は雁金屋清吉のことであり、ここでは八代目を指している。『東京書籍商組合史及組合員概歴』(注18)に「当主ハ江戸ニ生レ、九代(ママ)武田伝右衛門ノ次子ニシテ幸次郎ト称ス」とあるように、青山堂八代目当主は二代目伝右衛門の次子であった。続く傍線部では、二代目伝右衛門自身の口から、かつて文渓堂丁子屋平兵衛のもとで奉公していたと語られている。この二代目の言は、「明治初年東京書林評判記」や「紙魚の跡　浅倉屋の巻（一）」にみられる浅倉屋久兵衛の証言からも裏付けられる(注19)。

もう一つの資料は、浅倉屋による「紙魚の跡　浅倉屋の巻（四）」(注20)である。ここで浅倉屋は「七月（大正九年七月か）に亡くなった和書出版界の古老大島屋武田伝右衛門老人から嘗て聞いた話」として、福沢諭吉の本屋仲間加入について紹介している。括弧で示された注は『読売新聞』の編集者によるものと思われるが、この没年とされる大正九年は、現時点で確認できている最後の出版物『日本名勝詩選』『篆刻鍼度』『杜工部詩醇』の刊年とも合致する。

三代目伝右衛門に関しては、反町茂雄編『紙魚の昔がたり明治大正篇』(注21)に収められた書肆の談話が参考になる。とりわけ浅倉屋のそれは情報に富んでいる。

大島屋さんは武田伝右衛門の二代目の人で、私共の店に居た時分は政吉といっていました。極く根気がよく、若い時分「彙刻書目」など写しておりました。年季がすんで貸本問屋でした生家へ戻ると、ちょうどその時分、大切な米櫃の「梅暦」やその他の人情本の蔵版が続々と活版に出来てしまったので、貸本問屋もやりにくく、セドリに転向してしまったのです。そして市会を青柳で開くようになり、会主となって一時はなかなか盛んなものでした。惜しい事にまだ働き盛りに亡くなりました。舎弟が吉川弘文館さんの御出身で、後に雁金屋清吉さんの跡をついだ青山さんでした。(注22)

「二代目の人」が「私共の店に居た」「惜しい事にまだ働き盛りに亡くなりました」と述べているが、先ほどみたように二代目伝右衛門の奉公先は丁子屋平兵衛方であった。また、「和書出版界の古老」とも称され、大正九年に没したとされる二代目を「働き盛り」とするのは些か不自然ではなかろうか。

明治二四年（一八九一）に刊行された春秋園武田編・佳峰園等栽校『俳諧新五百題』(注23)の著作者は「武田正吉」、発行者兼印刷人は「武田伝右エ門」である。このうち前者は浅倉屋のいう「政吉」だとわかるが、後者は一見すると何代目の伝右衛門を指しているのかわからない。しかし、当時存命しているの

は、「政吉」を除けば先に確認した二代目ただ一人である。したがって、「舎弟」が八代目雁金屋清吉である「政吉」は、二代目伝右衛門の長子であるとともに、後の三代目であると考えられる。要するに、浅倉屋は本来三代目である「政吉」を「二代目」としていたのだが、同様の呼称は『紙魚の昔がたり　明治大正篇』に収められたほかの談話にもみられる。その理由は判然としないが、彼らは「政吉」が三代目だと知らなかったのではなく、単に「後嗣」という意で「二代目」の呼称を用いていただけなのかもしれない。なお、『俳諧新五百題』以降の出版物に「武田正吉（政吉）」の名がみえないため、三代目は少なくとも明治年間中に没したようである。

これまで確認してきた三代にわたる歴代伝右衛門の系譜をまとめると次のようになる。

初　代…天保の改革で処罰を受ける。安政三年没。

二代目…幼名「安次郎」。かつて丁子屋平兵衛方で奉公。初代の死没により、安政三年に二代目伝右衛門となる。大正九年没か。

三代目…通称「政吉（正吉）」。二代目伝右衛門の長子。浅倉屋久兵衛方で奉公の後、三代目伝右衛門となる。明治年間中に死没か。

三代目早世の後、大島屋の営業は再び二代目伝右衛門の手に委ねられたのであろう。だが、前述のとおり大正九年以降の出版物を確認できないため、大島屋は二代目伝右衛門の死とともに廃業したものと推察される。

二　中本と大島屋伝右衛門

次に大島屋の出版活動を種々の蔵版目録から概観していく。『御利生正札附千社参』初編の刊行から五年を経た文政三年（一八二〇）、大島屋は滝亭鯉丈作『花暦八笑人』初編を刊行し、以後本格的に出版活動を展開していく。翌文政四年に刊行された鼻山人作『玉散袖』下巻には「文永堂蔵版目録」が附載されており、こうした大島屋の初期の様子が垣間見える。

「文永堂蔵版目録」には、滝亭鯉丈作『花暦八笑人』初・二編（文政三・四年刊）、一筆庵主人作『人世栄枯松の操物語』（同三年刊）、鼻山人作『玉散袖』（同年刊）、滝亭鯉丈・南仙笑楚満人作『明烏後正夢』初編（同四年刊）、山東京山作『鷲談伝奇桃花流水』（文化六年刊）の蔵版が謳われるとともに、『松の操物語』後編（『貞烈竹の節談』）と『花暦八笑人』三編から八編までの刊行が予告されている。なお『鷲談伝奇桃花流水』は求版本である。

「文永堂蔵版目録」と同時期の目録に、梅暮里谷峨作『斯波遠説七長臣』巻五（文政四年刊）附載の「文永堂蔵版目録」がある(注24)。記載された書目は多く重複しているが、こちらにはさらに梅園主人作『奇談園の梅』（文政四年刊）、式亭三馬作『七癖上戸』（文化七年刊）の蔵版が謳われ、鼻山人作『契情意味張月』（文政六年刊）の刊行が予告されている。『七癖上戸』

も『鶯談伝奇桃花流水』同様に求版本である。

為永春水作『春色英対暖語』五編上巻所収の「米八婀娜吉丹治郎の物語類本目録」は、『春色梅児誉美』初―四編（天保三―四年刊）、『春色辰巳園』初―四編（同四―六年刊）、『春色恵の花』初―後編（天保七年刊）、『春色英対暖語』初―五編（同九年刊）、『春色梅美婦祢』初―四編（同一二年刊）などの所謂「梅暦シリーズ」の蔵版を示す目録である。先に浅倉屋が「梅暦」を大島屋の「大切な米櫃」と称していたように、これら一連の諸作品は明治期に至るまで大変な人気を博した当たり作であった。

梅暦シリーズ刊行を経て、大島屋は全盛期を迎える。この時期の様子を伝えるのが「書林文永堂蔵販目録」(注25)である。この目録には計四二の書目が列挙されているのだが、そのうち中本は三八作品（滑稽本は七、人情本は三一）というかなりの割合を占めている。紙幅の制約上、全ての書名は示せないので、ここでは求版本と判明しているもののみ掲げる。

十返舎一九作『諸用附会案文』（享保四年序）
式亭三馬作『戯場粋言幕之外』（文化三年刊）
同作『無而七癖酩酊気質』（同年刊）
同作『例之酒癖一杯綺言』（同一〇年刊）
同作『古今百馬鹿』（同一一年刊）
同作『素人狂言紋切形』（同年刊）
鼻山人作『傾城此糸蘭蝶記』初―三編（文政七年序）

以上のように、種々の蔵版目録からは中本を積極的に出版するだけでなく、他書肆から求版している様子が窺える(注26)。その割合からみても、大島屋の出版活動は中本が軸になっていたといっても過言ではない。

こうした中本と大島屋の関係性に加え、明治期まで中本を印行していた様子は、現存する中本自体からも指摘できる。

現存する中本には、見返しや奥付を欠いた本が多いため、出版もしくは流通に携わった版元を書籍から特定するのは困難である。しかしながら、版元を特定する術が全くないわけではない。書籍の表紙と附載された広告は、十分その手掛かりとなり得る。

中本のなかでも特に人情本の表紙には、華やかな千代紙風の料紙がよく用いられている。この料紙の文様には、書名や作品内容との相互関係(注27)がみられるだけでなく、版元ごとに異なる意匠が凝らされている場合もある。附録した「大島屋伝右衛門所用表紙文様一覧」は、大島屋が蔵版していた作品や、後述する処女香・初みどりの広告を有する書籍の表紙、つまり大島屋特有と思われる表紙文様を架蔵本から集成した一覧である。梅暦シリーズに好んで用いられているものから、作品を問わず用いられているものまで様々ある。これらの表紙は一編三巻が一冊に合冊され、口絵が藍摺（墨摺の場合もある）となっている後印本にも用いられている。

書籍に附載された広告も、版元を特定する手掛かりの一つで

ある。中本を出版した版元には売薬を兼業している者もおり、彼らは自らが発行した書籍にその広告をたびたび附載した。菊屋幸三郎の清涼香、大坂屋半蔵のじゅんほ丸、丁子屋平兵衛の花橘や雪の梅などがよく知られた例であろう。大島屋の場合、処女香（【図2】）と初みどり（【図3】）を商っている。

このうち処女香は、「為永春水精剤」と謳われる白粉下だが、実際は大島屋によって製剤・販売がなされていた。その販売は明治期に至っても続いており、萩原乙彦作『新門辰五郎游侠譚』初・二編（明治一二年刊）や松村春輔作『落花清譚春風日記』初編下巻（同一三年刊）の奥付でも宣伝がなされている（注28）。

こうした表紙や処女香・初みどりの広告を有する中本、特にその後印本は非常に多く、大学図書館や公共図書館にもかなりの割合で収蔵されている。それはまさしく、大島屋が長期にわたって中本を印行していたことの証左であるとともに、変わりなく中本が人々に受容されていた事実を物語っているといえよう。

本稿の冒頭でも述べたように、近世後期から近代初頭において戯作は貸本屋の主力商品であった。先に浅倉屋が「貸本問屋でした生家」と回想していたように、大島屋は明らかに貸本屋を顧客として意識し、中本を軸に据えた営業を行っていたのである。

三　大島屋伝右衛門の書籍流通

浅倉屋の言う「貸本問屋」という存在は、これまでも知られてはいた。前田愛氏はこれを「個人営業の貸本屋を対象に、営業用の貸本の戯作小説・写本類を卸す問屋」（注29）とし、濱田啓介氏はその業態を「貸本屋向きの本を刊行し、貸本屋に仲間売りをする業態」（注30）としている。

「貸本問屋」という語自体は近世期から用いられており、曲亭馬琴の書簡に次のように現れる。「文政十一年五月二十一日篠斎宛」書簡（注31）には「此板元素人故、自分ニて売捌キ候事不叶、丁子やハ書林なれども、かし本問屋ニて、此もの引受、売捌キ候故、凡五六わりの高利を得〔候〕ハねば引請不申候」とある。素人同然の版元に成り代わり、貸本問屋である丁子屋平兵衛が手数料と引き替えに売り捌きを肩代わりしていたという。また、「天保十一年十二月十四日篠斎宛」書簡には、「如仰の、如此くたれ本ハ、貸本問屋江頼置候ても得安く候得ども、元摺ニ而無きずの本は、久敷丁子屋江頼置候へども、手ニ入かね候間、無拠其御地江奉頼候事ニ御座候」とある。「元摺ニ而無きずの本」、つまり摺りも状態もよい本は、たとえ丁子屋でも手に入れるのは難しいと述べている。馬琴の書簡以外では、為永春水作『春告鳥』二編（天保年間刊・丁子屋平兵衛版）の序文に「今年も新著の発行を巳午の間から万よしとは面白き笑顔ぞ貸本問屋衆の喜悦重なる二編三編」、『藤岡屋日記』巻二九

「嘉永三庚戌年珍話八月分極日迄」に「九月二日夜雨降ニ、大伝馬町三丁目貸本問屋丁子屋平兵衛方江、手先之者参り候て申候ハ」(注32)などの用例をそれぞれ確認できる。

こうした用例をもとに改めて整理するならば、貸本問屋とは貸本向けの書籍を出版・蔵版し、それらを卸す問屋としての機能を有した書肆ということになろう。だが、さして出版を行っていない水戸の書肆山本作兵衛も自身を「貸本問屋」と称している(注33)ため、時には貸本屋に書籍を卸す仲卸業者をも貸本問屋と言ったようである。

近世期の用例からは確認できなかったものの、先に浅倉屋が回想していたように大島屋もまた貸本問屋であり(注34)、その営業は近代初頭にまで及ぶ長期的なものであった(【図4】)。では、主として中本を取り扱う版元であるとともに、貸本問屋でもあった大島屋はどのような書籍流通網を保持していたのであろうか。

大島屋を中心とする書籍流通を明らかにするため、大島屋が蔵版していた作品や、前述した表紙・広告を有する書籍を対象に調査を行い、それらに押捺された貸本屋のものと思われる蔵書印を収集し表にまとめた(【別表】)。蔵書印からその印を使用していた貸本屋を特定するのは難しく、地域の判明した例はそれほど多くないが、流通の片鱗を窺い知るには十分であろう。この表から大島屋の携わった書籍が流通を経て、最終的に行き着いた地点が判明する。

【別表】の地域には、江戸・京都・大坂をはじめとして、陸奥国・出羽国・加賀国・越後国・若狭国・常陸国・上野国・武蔵国・信濃国・甲斐国・遠江国・尾張国・伊豆国・紀伊国・伊勢国・近江国・播磨国・備中国・備後国・安芸国・伊予国・筑前国・肥後国を確認できる。本が卸された時期や仕入れた書肆もわからず、扱いにくいデータであるが、ほぼ全国的ともいえるかなり広い範囲に書籍が流通している様子が窺える。だが、明治期も含めた大島屋の出版物にみえる売弘所や売捌所からは、こうした全国的な流通の痕跡を確認できない。はたして、大島屋は広域的な流通網を本当に保持していたのであろうか。

拙稿「大島屋伝右衛門出版書目年表稿」をもとに、文化一二年から明治元年までの間に大島屋と共同で出版を行っている書肆を集計した。そのうち、上位に位置する書肆は次のとおりである。なお、集計にあたっては、大島屋にとって画期となったと考えられる『春色梅児誉美』の刊行以前と以後にわけている。

『春色梅児誉美』以前(文化一二〜天保二年)

越前屋長次郎	10
鶴屋金助	9
西村屋与八	9
丁子屋平兵衛	7
大坂屋茂吉	6
河内屋茂兵衛	5

『春色梅児誉美』以後（天保三～明治元年）

丁子屋平兵衛	12
河内屋茂兵衛	10
西村屋与八	8
秋田屋市兵衛	5
河内屋長兵衛	4
菊屋幸三郎	3

『春色梅児誉美』以前は、ほかの江戸の書肆と出版を行うなかで地本問屋としての足場を固めている感がある。加えて首位に立つ越前屋長次郎という存在は、梅暦シリーズをはじめ春水作品を多く出版・蔵版していくことになる大島屋の今後を予感させるものである。対して『春色梅児誉美』以降では、河内屋茂兵衛や河内屋長兵衛、秋田屋市兵衛といった上方の書肆との出版が増加する。とりわけ、近世後期から近代初頭にかけて絶大な勢力を誇った河内屋一統の存在は見逃せない(注35)。このような傾向は大島屋だけでなく、中本の出版全体にみられる。鈴木圭一氏は、ここにすでに全国に拓かれていた読本の流通網が利用されていると指摘している(注36)。

だが、本稿ではさらに大島屋と丁子屋平兵衛との関係に注目しておきたい。丁子屋は共同で出版を行っている書肆として常に上位にあるだけではない。越前屋長次郎は馬琴の「天保九年十月二十二日篠斎宛」書簡のなかで「丁子屋のふところ小刀」と称されるほどに丁子屋と懇意であった。また、丁子屋は河内屋茂兵衛と相版で読本や人情本を多く出版しており、両者が近しい間柄であったことは容易に想像される。大島屋の書籍流通網には、丁子屋の影が見えてきはしないだろうか。

丁子屋が貸本問屋として素人同然の版元に成り代わり、売り捌きを行っていたのはすでに確認した（「文政十一年五月二十一日篠斎宛」書簡）。それだけでなく、「天保十二年正月二十八日篠斎宛」書簡にある春水の中本が「上方筋ハ殊之外行れ、東北ハ奥州迄、西ハ長崎を限り、春水の中本多売候由、丁子屋悦吹聴致候事ニ御座候」という一文は、丁子屋が上方の書肆やほかの地域への流通を担っていたことを示唆している。おそらく、二代目伝右衛門が丁子屋方で奉公するより前から、つまり初代伝右衛門の時代から大島屋と丁子屋は親しかったのであろう。丁子屋の斡旋により越前屋長次郎や河内屋一統との知遇を得た大島屋は、読本の流通網をベースとする販路を獲得できた。これにより、豊富な中本の蔵版を売りとしながら、全国の貸本屋を対象とした営業を行うことが可能となったのだと考えられる。

おわりに

大島屋伝右衛門は、文化年間の創業から中本を多く刊行するだけでなく、ほかの書肆から積極的に求版することによって、次第にその蔵版書目を豊かなものとしていた。そして丁子屋平兵衛の流通網や、丁子屋の協力により得た河内屋一統をはじめ

とする上方の流通を利用しながら、中本を明治期まで世に送り出していたのであった。

版元、そして貸本問屋として、書籍を市場へ供給し続けることで、大島屋は近代初頭に至るまで貸本屋を、また彼ら貸本屋を通じた人々の中本受容を支えていたのである。

注1　拙稿「誠光堂池田屋清吉の片影―文書からみる明治期貸本屋の営業と生活―」（『中央大学国文』六〇号、中央大学国文学会、二〇一七年三月）。

2　長友千代治著『近世貸本屋の研究』（東京堂出版、一九八二年）四五頁。

3　注2前掲書（四六～五〇頁）および『江戸時代の図書流通』（思文閣出版、二〇〇二年）一三四頁。

4　濱田啓介「馬琴をめぐる書肆・作者・読者の問題」（『近世小説・営為と様式に関する私見』京都大学学術出版会、一九九三年所収。初出は一九五三年）。

5　人情本刊行会叢書『人情本略史』（人情本刊行会、一九二六年）。

6　前田愛「出版社と読者―貸本屋の役割を中心として」（『前田愛著作集第二巻　近代読者の成立』筑摩書房、一九八九年所収。初出は一九六一年）。

7　彌吉光長著『未刊史料による日本出版文化』三巻（ゆまに書房、一九八八年）所収。

8　国立国会図書館蔵『諸問屋仮組名前帳』四巻（811-19）。

9　井上隆明氏は『改訂増補近世書林板元総覧』（青裳堂書店、一九九八年）において、西島長孫撰『歴代題画詩類絶句抄』と酒井抱一編『光琳百図』（求版本。原版は文化一二年刊『光琳百図』前編二冊）の二書をあげ、大島屋の活動時期を文化一〇年（一八一三）から明治三〇年（一八九七）としている。だが、『歴代題画詩類絶句抄』の版元は、『割印帳』によれば大島屋ではなく宝翰堂堀野屋儀助である。また、後述するように明治三〇年以降の出版物も存在する。

10　中本。二巻二冊。歌川国芳画。関西大学図書館蔵本（L23：900：6319～6320）の奥付は次のとおり。「文化十二乙亥歳正月発兌／江戸書賈　和泉屋市兵衛／三崎屋清吉／中村幸蔵／大嶌屋伝右衛門梓」。なお、本書の見返し・口絵にはそれぞれ「江戸書賈　文耕堂梓」「板元文耕堂」とあるが、これが当時大島屋の名乗っていた堂号かどうかは現段階では不明である。

11　いずれも活版印刷の袖珍本。発行者は「武田伝右衛門」、発行所は「文永堂」。

12　青木嵩山堂の廃業年は、青木育志・青木俊造著『青木嵩山堂―明治期の総合出版社』（アジア・ユーラシア総合研究所、二〇一七年）による。

13　貸本屋が版元となり出版を行う事例については、高木元「江戸読本の板元―貸本屋の出版をめぐって―」（『江戸読本の研

究』ぺりかん社、一九九五年所収。初出は一九八八年）に詳しい。

14 半紙本。一〇巻一〇冊。内題は「火宅罪火消」。

15 東京大学史料編纂所編『大日本近世史料　市中取締類集一八』（東京大学出版会、一九八八年）。

16 『天保雑記』第五一冊（内閣文庫所蔵史籍叢刊『天保雑記（三）』汲古書院、一九八三年所収）。

17 四葩山人「文渓堂と八犬伝」（『高潮』三号、吉川弘文館、一九〇六年五月）。

18 東京書籍商組合、一九一二年。

19 「明治初年東京書林評判記」（『古本屋』三号、荒木伊兵衛書店、一九二七年所収）には、「大島屋伝兵衛（ママ）及麹町古本屋森田鉄五郎其外丁忠、丁善等皆こゝの出身也」、「紙魚の跡浅倉屋の巻（一）」（『読売新聞』一八四六三号、一九二八年七月二五日）には「『八犬伝』や『梅暦』や其他いろいろな人情本の版元丁子屋さんは、文渓堂大渓半兵衛といつて、ずゐ分派出な人でした。近火のあつた翌朝など力士や役者が見舞に来て店にゐたので、大に人目を引いたものです。大伝馬町二丁目に居られました、大島屋武田伝兵衛（ママ）、麹町の古本屋森田鉄五郎、その他、「丁忠」「丁善」皆ここの出身です」とある。

20 『読売新聞』一八四六六号（一九二八年七月二八日）。

21 八木書店、一九九〇年。

22 浅倉屋吉田久兵衛「和本屋生活半世紀の思い出」。

23 春秋園瀧川編・佳峰園等栽校『明治玉簾集』（明治二二〈一八八九〉年刊）の改刻改題本。

24 『斯波遠説七長臣』の刊行年については、拙稿「大島屋伝右衛門出版書目年表稿」（『書物・出版と社会変容』二一号、「書物・出版と社会変容」研究会、二〇一八年一〇月）を参照のこと。

25 東京大学附属図書館蔵『文永堂文渓堂蔵販目録』（E24:392）所収。同書は大島屋伝右衛門・丁子屋平兵衛・加賀屋源助らの目録が、後人の手によって一冊に合冊されたものである。

26 中本、とくに文政期の人情本を大島屋が求版していたことは、注6前掲論文でも指摘されている。

27 例えば、鶴亭秀賀作『安矢女艸』初―四編（安政五―六年刊）の表紙には菖蒲の絵、忠臣蔵を題材とした為永春水ほか作『いろは文庫』初―一八編（天保七―明治五年刊）の表紙には大石内蔵助の家紋（二つ巴）の文様が用いられているなど。

28 大島屋が処女香の製剤・販売を担っていたことや、その販売時期については、二〇一七年度中央大学国文学会で行った口頭発表「大島屋伝右衛門と池田屋清吉―処女香をめぐる版元と貸本屋―」のなかで指摘した。

29 中野三敏ほか校注『新編日本古典文学全集　洒落本・滑稽本・人情本』（小学館、二〇〇〇年）四二一頁の頭注。

30 注4前掲論文。

31　以下、書簡の引用は『馬琴書翰集成』第一巻―別巻（八木書店、二〇〇二―二〇〇四年）による。

32　『近世庶民生活史料　藤岡屋日記』四巻（三一書房、一九八八年）所収。

33　秋山高志著『近世常陸の出版』（青裳堂書店、一九九九年）の図版にみえる「水戸青柳町／貸本問屋／山本作兵衛」印、および国立国会図書館蔵『今昔物語』（W67-N20）に押捺された「水戸本五丁目／貸本問屋／山本作兵衛」印による。

34　大島屋が貸本問屋であったことは、注6前掲論文および前田愛「明治初期戯作出版の動向―近世出版機構の解体―」（『前田愛著作集第二巻　近代読者の成立』筑摩書房、一九八九年所収。初出は一九六三・一九六四年）でも指摘されている。

35　濵田啓介「近世後期における大阪書林の趨向―書林河内屋をめぐって」（『近世文学・伝達と様式に関する私見』京都大学学術出版会、二〇一〇年所収。初出は一九五六年）を参照。

36　鈴木圭一「人情本の全国展開―洒落本・中本の出版動向より」（『中本研究―滑稽本と人情本を捉える』笠間書院、二〇一七年所収。初出は一九九七年）。

〔附記〕

本稿は平成二九年度日本近世文学会秋季大会（於鹿児島大学）における口頭発表に基づいて、加筆・修正したものです。資料の閲覧・利用にご協力いただいた鈴木圭一氏および各機関にお礼申し上げます。なお、本稿は科学研究費補助金（特別研究員奨励費課題番号：18J20862）による成果の一部です。

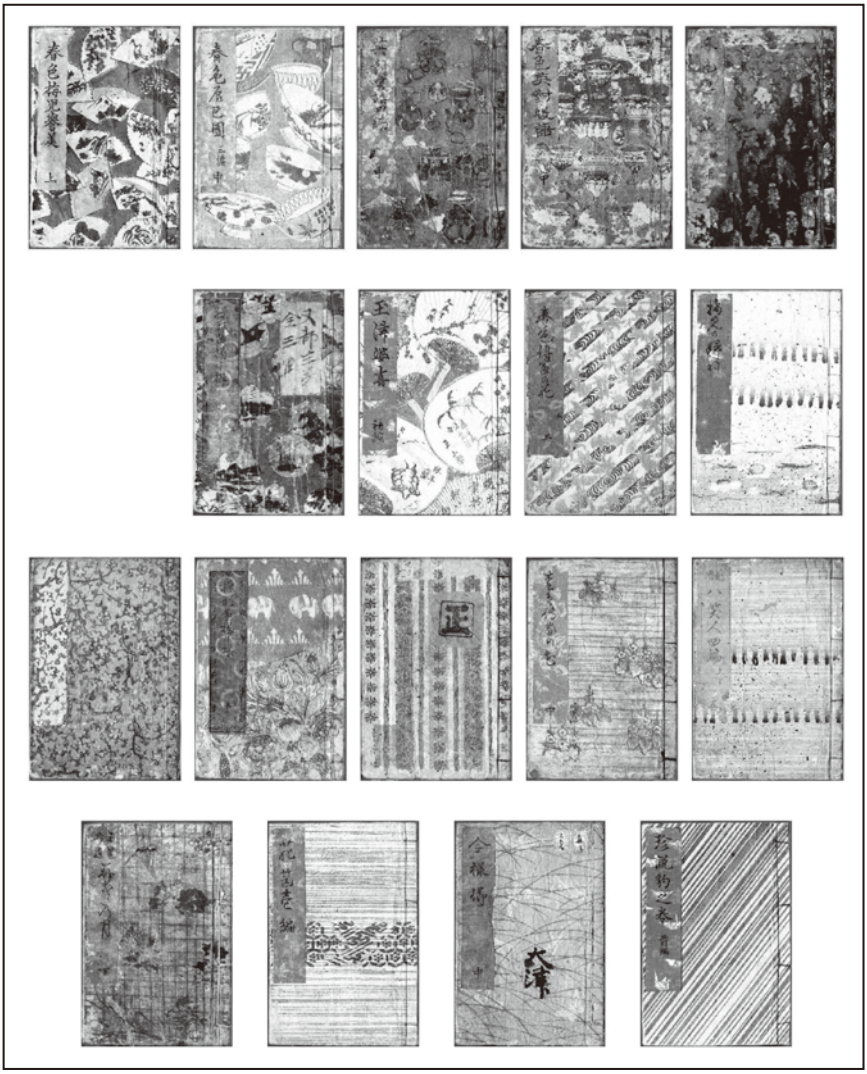
（まつなが　りゅうせい／中央大学（院）・日本学術振興会特別研究員）

【図1】

【図2】処女香の広告（架蔵『娜真都翳喜』三編）

【図3】初みどりの広告（架蔵『娜真都翳喜』三編）

【図4】貸本屋へ向けた広告（架蔵『娜真都翳喜』三編）



大島屋伝右衛門所用表紙文様一覧

【別表】

地域	印記	印主	書名	所蔵	請求記号	表紙	処女香	初みどり	蔵版目録	備考
江戸	釜亦	釜屋亦兵衛	花街鑑	架蔵			○		○	
	紙徳	紙屋徳八	三国一夜物語	京都大学文学研究科図書館	国文学/浜田啓介文庫Pg/92					求版本。見返しに「東都書林　文永堂梓」とある。
	近嘉	近江屋嘉兵衛	女大学 初―後編	国立国会図書館	京乙-68				○	蔵版目録による仮の判断。
	［山形］両国 大重		春色辰巳園 初―四編	東京大学国語研究室	A4/0383		○		○	
	京橋／村田／太刀売		花暦八笑人 三編追加下	鈴木圭一氏					○	大島屋版。
	錦耕堂	山口屋藤兵衛	春色英対暖語 巻四	鈴木圭一氏		○			○	ほか１顆（「［山形に吉］三新」）。
	貸本 松寿堂	大黒屋平助	質屋雀 初―二編	国文学研究資料館	ナ4-245-1～4					大島屋版。
	貸本商 芝区西久保／八幡町二十一番地／大野屋金七	大野屋金七	花暦八笑人 初―五編	国文学研究資料館	ナ4-11-1～6	○			○	明治期の目録あり。
	東京［丸形に本］牛込細工町／貸本所／池田屋清吉	池田屋清吉	縁結月下菊	国立国会図書館	208-714	○	○			求版本。
京都	亀武	亀屋武助	春色辰巳園 巻九	架蔵		○			○	ほか１顆（「大勝」）。
	富山堂		廓雑談 初―三編	東京大学国語研究室	A4/0305/1～3	○			○	
	京鮒富角／安井		風見種 初―三編	東京大学国語研究室	4L/130/1～3	○	○			ほか１顆（「貸本安井」）。
	貸本安井		娜真都翳喜 初―四編	国文学研究資料館	54-229-1～4	○				大島屋版。
大坂	［丸形に十］具重	具足屋重兵衛	春色辰巳園 巻一	架蔵		○			○	ほか１顆（「具重」）。
	三木与	三木屋与助	花名所懐中暦 三編中	架蔵		○			○	
	本亦	本屋亦兵衛	清談松の調 初―四編	架蔵		○				大島屋版。ほか２顆（「なら久」「吉田屋」）。
	万かし本／南久宝寺町壱丁目／布屋佐七	布屋佐七	其小唄恋情紫 二編	東京大学国語研究室	A4/0348			○	○	ほか１顆（「文秀堂」）。【図4】を備える。
	書林 大阪塩町／三休橋北／山本与助	山本与助	春色英対暖語 初―五編	東京大学国語研究室	4L/78/1-14	○	○		○	
	三休橋通／博労町南／山本勘助	山本勘助	清談松の調 四編	早稲田大学図書館	^13 03229 0002	○				大島屋版。ほか１顆（「書林 大阪塩町／三休橋北／山本与助」）。
	柏精	柏原屋清右衛門	春色梅児誉美 初―四編	立命館大学ARC	hayBK03-0822-01～12	○	○	○	○	ほか2顆（「鴻安」「本熊」）。
陸奥国	嵩文堂	大塚屋長兵衛	花暦八笑人 四編下	鈴木圭一氏			○		○	
	弘前／［入山形に二］樽沢／百石町		秋色絞朝顔 四編	弘前市弘前図書館	W913.54/42		○			ほか１顆（「本亦」）。
	磐城平／飯田商店／壱丁目		清談松の調 初―四編	鈴木圭一氏			○			ほか１顆（「飯田」）。

出羽国	羽前／［山形に一］万屋／大山		春色英対暖語	国文学研究資料館	ナ4-199-23～27	○	○		○	
	出羽［曲尺形に入と一］山形／尾関／鉄炮町		花筐 初―五編	東京大学国語研究室	A4/0174		○			
	米沢桐町／高田屋仙松		契情肝粒志前―後編	専修大学図書館	000/Z00/M2507.1～4				○	蔵版目録による仮の判断。
	山形／［山形に二］小松屋／十日町		春色辰巳園 巻十	鈴木圭一氏		○			○	
	秋田［山形に亻］茶町扇之丁／貸本所／伊藤源吉	伊藤源吉	清談和歌緑三編	鈴木圭一氏			○			
	上茶屋町／日新堂／弐丁目		花暦八笑人 初―四編追加	岐阜大学図書館	913.55/17.8/25430		○		○	
	羽州山形／［入山形に二］加藤屋／三日町		契情肝粒志	国文学研究資料館	ナ4-692-1～15				○	
	羽州［丸形に藤］置場郡／藤屋／大町上		恩愛二葉艸 三編 上	鈴木圭一氏		○			○	
加賀国	金沢区御歩町／テカ／かし本所／ナス／二番丁廿五番地	寺田屋	廓雑談 初―三編	東京都立中央図書館	477-31	○			○	ほか１顆（「桜渓」）。
越後国	書林 北越□□□／東江堂／川村屋勘兵エ	川村屋勘兵衛	貞操婦女八賢誌 四輯 巻二	鈴木圭一氏		○	○		○	
	越後／石川平助／寺泊	石川平助	花暦八笑人 初―五編	東京大学国文学研究室	近世/36･11/21		○		○	
	和漢御書物所／越後柴田上町／新津屋木治兵衛	新津屋木治兵衛	娜真都翳喜 初―三編	架蔵			○	○		ほか3顆（「小田嶋」「濱崎」「新発田／青林堂／蔵書記」）。
若狭国	松本 文明堂		処女七種 初―七編	東京大学国語研究室	A4/0031		○			求版本。
	坂喜	坂本屋喜一郎	廓雑談 上	鈴木圭一氏					○	蔵版目録による仮の判断。
常陸国	粗毛［山形にス］		三日月阿専 前―後編	架蔵			○			求版本。
上野国	上州［曲尺形に大］二軒在家／石原／金銀不用		質屋雀 初編 上	架蔵						大島屋版。
武蔵国	横浜書林 紀伊国屋		春色梅児誉美 巻六	弘前市弘前図書館	W913.54/16	○			○	
	横浜／［山形に高一］高橋屋／相生二		花街寿々女	玉川大学学術情報図書館	w913.54/ｻ		○		○	
信濃国	上田書林 宮島舎	宮島舎喜兵衛	珍説豹之巻	架蔵		○				表紙による仮の判断。
	信上／［一つ引きに三つ星］大藤／塩尻		春色伝家の花 初―四編	架蔵		○	○		○	
	玉壺堂	浜屋為吉	春色梅美婦祢 二編	東京大学国語研究室	A4/0378	○			○	【図4】を備える。
	慶林堂／高美記	高美屋甚左衛門	春色英対暖語 初―五編	早稲田大学図書館	^13 03076		○		○	
甲斐国	甲府／玄々堂／三井		花暦八笑人 初―五編	早稲田大学図書館	^13 03094		○		○	

遠江国	掛川［山形に万］金銀／山崎／不用		契情肝粒志 後編上	鈴木圭一氏					○	蔵版目録による仮の判断。
尾張国	熱田神戸町／竹葉堂／笹屋徳右エ門	笹屋徳右衛門	三日月阿専 前編	架蔵		○				求版本。表紙による仮の判断。
伊豆国	豆州三島市ヶ／原町盈緗堂／朝日仲次郎	朝日仲次郎	花暦八笑人 五編下之巻	鈴木圭一氏					○	大島屋の蔵版目録（明治期）を備える。
紀伊国	若山／京屋福之助／書林	京屋福之助	廓雑談 三編 上	鈴木圭一氏		○			○	
	湯浅／橋義／中町		貞烈竹の節 談 中	鈴木圭一氏			○		○	ほか１顆（「若山／坂本屋喜市郎／書林」）
	若山／坂本屋喜市郎／書林	坂本屋喜市郎	貞烈竹の節 談 中	鈴木圭一氏			○		○	ほか１顆（「湯浅／橋義／中町」）
伊勢国	松阪［丸形に加］おしろい町／本屋嘉助	本屋嘉助	軒並娘八丈 四編 中	鈴木圭一氏			○			求版本か。
	勢州／［山形に久］柏屋久七／松阪	柏屋久七	春色梅児誉美　三編 中	関西大学図書館	L24/11-2-B/3	○	○		○	
近江国	江州／［方形に十］西川勝助／八幡	西川勝助	春色伝家の花 初―五編	早稲田大学図書館	^13 02925	○	○		○	ほか１顆（「八幡魚屋町／万国書籍所／西川勝助」）。
	八幡魚屋町／万国書籍所／西川勝助	西川勝助	春色伝家の花 初―五編	早稲田大学図書館	^13 02925	○	○		○	ほか１顆（「江州／［方形に十］西川勝助／八幡」）。
播磨国	播中［曲尺形にモ］中嘉		娜真都翳喜 四編	架蔵		○				大島屋版。
備中国	岡山［山形に二］浜田町／貸本所／中嶋屋		娘太平記操 早引 初―四編	鈴木圭一氏			○		○	
	岡山橋本町／御書物所／片上屋孫兵衛	片上屋孫兵衛	春色辰巳園 巻九	鈴木圭一氏		○			○	ほか１顆（「玉泉堂 岡山橋本町北側／貸本所／片上屋孫兵衛」）。
	玉泉堂 岡山橋本町北側／貸本所／片上屋孫兵衛	片上屋孫兵衛	春色辰巳園 巻九	鈴木圭一氏		○			○	ほか１顆（「岡山橋本町／御書物所／片上屋孫兵衛」）。
備後国	備後府中加藤書肆		春色玉襷 初―三編	架蔵		○				表紙による仮の判断。
安芸国	広島［井桁形に□］播磨屋町北側／書籍処／井筒屋出店		清談松の調 中	鈴木圭一氏		○		○		
伊予国	イヨ［山形に圭］松山本町三丁目／貸本所／野中栄三郎	野中栄三郎	仇競今様櫛 初―三編	早稲田大学図書館	^13 02922	○			○	
	ウワ［丸形に加］廉伝		合世鏡 初―三編	お茶の水女子大学附属図書館	913.5/N76/1(1)～1(9)	○	○			ほかに貸本屋高橋伝吉による注意書きが貼付されている。
筑前国	筑前国／親愛社／山家駅		春色梅児誉美 初―四編	架蔵		○	○		○	
肥後国	熊本県　山鹿町／万屋／坂口		貞操婦女八賢誌 四編	関西大学図書館	L24/11-112-A/4-1～2				○	ほか１顆（「肥後山鹿町／和漢書籍／同文具類／井出郡太」）。大島屋の蔵版目録（明治期）を備える。
	肥後山鹿町／和漢書籍／同文具類／井出郡太	井出郡太	貞操婦女八賢誌 四編	関西大学図書館	L24/11-112-A/4-1～2				○	ほか１顆（「熊本県山鹿町／万屋／坂口」）。大島屋の蔵版目録（明治期）を備える。